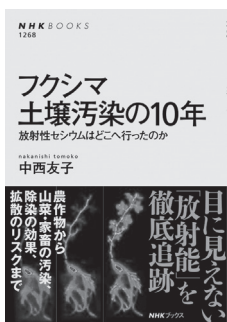


フクシマ土壤汚染の10年 放射性セシウムはどこへ行ったのか

中西 友子



「フクシマ土壤汚染の10年～放射性セシウムはどこへ行ったのか～」のタイトルを目にして最初に頭に浮かんだのは、正に『コロナ禍』である。多くの人の生活や考え方を一変させた(当てられている『わざわい』の字は違うが)災(禍)害であることはもちろん、それ以上に

筆者が感じたのは「科学と『わざわい』」である。我が国では2020年以降、新型コロナウイルス感染者数の増減を「波」とし、多くの専門家がその理由をはじめ様々な事象について推測・解説している。その予想に対し「当たった」や「外れた」、場合によっては「専門家なのに……」といった言葉を様々なところで目や耳にする。当然SNS上での無責任な発言に対して、いちいち腹を立てているわけではないが、それを見るたびに筆者は「今、得られている情報を最大限に活用し、様々な可能性を考えつつ推論し、新たな情報を積極的に取り入れ、その都度、修正や変更を加えていくことが『科学』の本質である」という先輩研究者の言葉を思い出す。とかく大きな『わざわい』があると、この先、どうなるのかを早く知りたいと思い、結論を急いでしまう。情報量の少ない結果は当然誤差が大きく、科学としては「その後」が非常に重要となる。ただ、どのような『わざわい』も時間が経つと人々の記憶が薄れ、感心もなくなっていくことが多い。一方、専門家はより最新の知見を求め一層専門的な議論に入っていく。このようななか東日本大震災による福島第一原発事故から10年を1つの節目とし土壤汚染を中心とした総括を一般書としてまとめられた本書は非常に貴重である。

本書を紹介するため改めて読み進めていくと、「さ～て、困ったぞ!」と感ずるようになった。通常、読んで

もらいたい対象やネタバレしない程度に概要を紹介するのだが、この両方が難しい。対象を考えても、農学(土壌・植生)・環境学・放射線学など様々な分野の内容が入っている。また、専門家なのか、学生を含む入門者なのか、それとも専門外の一般の方々なのか、これらも良い意味で絞られていない。10年間蓄積された研究結果の総説論文のようである一方、同位体や放射能、半減期などの説明もあり、放射線の知識ゼロからでも読み進めることができる。なお、著者の中西友子先生は長年農学の分野に身を置かれ、ご専門が放射線植物生理学である点も「広い対象者に分かりやすく」といった本を書かれた要因かと勝手に納得している。

本書の章立てであるが、序章の『放射能』を理解する—汚染をめぐる基礎知識から始まり、「第1章：土壌の汚染と除染の方法—セシウムはどう固定されるか」、 「第2章：吸収の抑制と排出の仕組み—セシウムはどう取り込まれるか」、 「第3章：果実への蓄積と二次汚染—セシウムは植物内でどう動くか」、 「第4章：森林の汚染から河川への流出—セシウムはどう運ばれるか」、そして、補論として「セシウムボールと放出源」と続くが、各章には10から20の細項目があり、それぞれが2～3ページ、長くても数ページにまとまっている。また、図表も多く理解が進む。つまり概要を書こうとしても、各項目が必要十分な範囲で本当に端的にまとめられており、ネタバレしなしてこれ以上要約することは筆者の能力では難しい。このようにちゃんと紹介できていない言い訳を書き連ねてしまったが、まさにこれらが本書の最大の特徴と思い、このような形で紹介させてもらった。

本書は著者が2013年に出版した「土壤汚染～フクシマの放射性物質の行方～(NHK出版)」の続編であり、これと比較するとこの分野の変遷も感じることができる。また、本書で紹介されているデータは東京大学大学院農学生命科学研究科が中心となって行われた研究結果で、一般向けに公開された報告会及びシンポジウムの資料を今でもサイト(<https://www.a.u-tokyo.ac.jp/rpjt/>)で確認できる。一部は動画で見ることのできるのも、ぜひご覧いただきたい。

最後に被災された方及びそのご家族の方々に対し改めてお見舞いを申し上げると共に、これまで震災復興に携わられた多くの方々に対し深く敬意を表したい。

(関 健介 杏林大学保健学部診療放射線技術学科)

(ISBN978-4-14-091268-3, B6判, 224頁, 定価1,430円(本体1,300円), NHK出版, <https://www.nhk-book.co.jp/>, 2021年)